

拝啓、突然のお手紙、不躰とは思いつつ藁をさつかむ思いでペンを取らせて頂戴しました。

先生が書かれた「寝たきりにならず、自宅で「平穩死」を拝見すればするほど、私は取り返えしがつかないことをしてしまった後悔とやりきれなさで途方に暮れている情けない五十八歳の中年男でございます。私の母は、さうすぐ九十歳になる自立心の強い女性で、一軒家の自宅で一人暮らしをしております。私と妻は、そこから車で五分あまりのマンションに住み、毎日母の様子を見に行き来する毎日でございます。

事の発端は、昨年十月二十九日の夜、母から電話があり転倒したから助けてほしいということ。私が車でかけつげると母は廊下は横たわり、右手首が不自然に曲がっている痛々しい姿でした。夜間だったので急患で手当てをして頂ける整形外科の先生がいる病院をようやく見つけ車で連れて行きました。とりあえず応急手当てして頂いている先生に私は咄嗟に入院させて頂けないかとお願いしました。

それは利き手の骨折で一人暮らしの母が何かと不便でまた転倒する危険があると思ひ、とりあえず治るまで入院した方が良いという判断からうでした。しかし、この判断が負のスパイラルの始まりだったのです。

翌日十月三十日入院しましたが、二日後の午前病院から突然連絡が来り、母がベッドから転倒し、大腿骨頸部骨折をしたので先生から手術の説明がありますのでなるべく早く来てほしいということでした。その日の午後仕事を早退し病院にかけつけると、先生が開日一番なるべく早く手術をしてリハビリを開始致します。予後は今までどおりの生活が難しく、ベッド回りの生活になると思ひますが、施設の紹介をしますので安心して下さいと言われました。しかし、私としては、病院に居れば安心できると思ひ母をあずけたのに、なぜまた骨折したのか納得できなうと言ふと、先生は病院に過大な期待をされて困る。病院だから絶対安全というわけではないと言われました。

十一月四日無事手術が終わり、その日からナースステーションの前の大部屋（六人部屋）のベッドで、回りに柵が取り付けられベッドから出られない

ようになさりました。回わりの患者は皆寝たきりの高齢者で、他の部屋と他のフロアをほとんど重度の高齢者ばかりでした。スグに聞いた話では、その病院は地域の施設の受け入れ病院で、まるで旅行会社と地域の土産屋とのタイアップで成り立っているような所でした。

一日二十分ほどのリハビリで、あとは一日中ベントの中で身動きできない状態で、母の足は日増しに細くなっていきました。私はこのままでは寝たきりになるのではないかと不安になり、リハビリが出来る老健へ連れて行きました。そこでは、栄養士、理学療法士、作業療法士など様々の担当の説明を受け、三ヶ月短期集中リハビリの為入所致しました。

しかし、そこでは私物の持ち込みは禁止され、寝るときのパジャマも許可されませんので、着のみ着のまま寝ることになっていました。母は転倒の危険があるというので、車椅子に紐でい巻き付けられ自分で立ち上がれないようになさりました。そして寝るときは、なぜか母のベントだけオースティンヨシの前廊下でした。

母は私に対して「何でこんなことするの？、私のことが邪魔なの？」と

恨むような目つきで私を睨んでいました。私は必死で「そんなことはないよ、
また前と同じように生活できるようにハビリする為だから三ヶ月間かん
ぽくよ」と説明しましたが、母は諦めたように「どう良くはならないよ、
それより早くここから出さ」と懇願しました。私は胸が張り裂ける
思いで母を後にしました。

ようやく退所まで後二日という日の午前、施設のケアマネ^{から}連絡があり、
朝から母の様子がおかしい、脳梗塞の疑いがあるので病院へ連れて行く
下さいと言われ、私がすぐかけつけると、母は施設の廊下の中央に車椅子で
ゆっくり前へこいでいました。「おエス」と声をかけると、今まで見たことか
ない位不安そうな顔で振り返り私を見るなり何かを話はじめました。
しかし、その内容は支離滅裂で意味をなさな^{失音症?}いものでした。言葉にならな
いことを繰り返している母を見て、私は初めてとんでもないことをしてしまった
とショックで、すぐに母を車で連れ出し、二度とその施設には戻りませんでした。
脳神経外科のCT検査では、脳梗塞の兆候は見られず（母は
10ヶ月間カーが入っているのでMRIは使えません）

三日間の検査で退院させられ施設へ戻るように言われました。

私の心の内では、もう既に家へ連れて帰るといふ決心がついていましたので、薬だけ処方して頂き、自宅へ連れ戻しました。不思議なことに、母は落ち着いて、言葉も少しずつ出て来るようになり、意志の疎通は出来るようになりました。勿論、前のような母ではありませんが、家の中の勝手は分かってるせいか、トイレも浴槽も歩行器を使って行き来をしております。

時々、母の前で涙がつい出てしまうことがあります。それを見た母が不思議そうに顔で「涙、涙……」と私の頬をさわろうとします。私は母に申しわけない気持ちで一杯になり、又涙が溢れ母の顔が霞んでしまいました。

これからどうすればいいのか途方に暮れて、筆無精の私がつい長いお手紙を見が知らすの先生に書いてしまいました。母を一人家に残しておくのは、心配なので、午前・午後には一時間ずつヘルパーに来て頂くしております。

これこそ一人でいる時間が長いので、私が仕事を辞めて介護に専念するか、私と母と共働きでようやく生計を立てている身としては、その選択は現実的でないことは十分承知しております。

ただ、母には家で最後を平穏に迎えてほしいと願うばかりです。
これから母の笑顔を取り戻す介護をしていく覚悟でございますが、
さし、先生にお時間がありません。ご助言を頂ければ、この上ない幸福で
ございます。

敬具

平成三十七年三月二十日